

21世紀の日本のかたち（43）

東日本大震災の復興に向けて（4） —大地の取戻し・福島県復興ビジョン—



戸沼幸市
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

1. 福島第一原発の風景

福島県の浜通りには発電所がずらりと並んでいます。新地、勿来、原町火力、広野火力、そして福島第一原子力発電所（1～6号機）、福島第二原子力発電所（1～4号機）です。これらの発電所でつくられた巨大量の電気の殆どは首都圏に送られ、東京など現代の文明生活を支えているのです。このための鉄柱をつないで張られた高压送電線が、東京、福島間の新幹線の車窓からよく見えるのです。



福島県の県土構造と福島第一原発
(資料：福島県資料をもとに筆者加筆)

3. 11、ここにも大地震津波が襲い、福島第一原発は致命的に被災し、原子力発電災害というこれまで我が国では経験したことのない大災害に遭遇することになりました。

1、3、4号機の建屋の屋根と外壁は、水素爆発によって吹き飛ばされ、鉄骨がむき出しになりました。1、2、3号機は被災直後、

メルトダウン（炉心熔解）し、原発事故としてはチェルノブイリ級、最悪の「レベル7」とされました。事態の深刻さは、放射性物質が原子力施設の外に放出されていることです。



地震・津波 被災後の福島第1原発(2011/03/18)
(写真：DigitalGlobe)

それにしても、原子力の平和利用を掲げ、現代科学技術の粋を集めて建設されたはずの原子力発電装置の旧式ぶりには驚かされます。

福島第一原発の1号機は運転40年目で国内最古級とか、素人目にも見るからに劣化していると感じられます。放射線量の充満した現場での作業の困難さはあるとしても、原発本体のコントロール、冷却装置の回復、汚染水処理能力の回復と、事態収束のために4ヶ月もの日時を要しているのもこのことと関連あるに違いありません。そして東京電力、国の対応のまずさも目立ちます。

今回の原発災害の深刻さは、原子炉からの放射性物質の外部への放出、放射性物質の極めて広範囲な拡散です。

私も岩手県、宮城県の被災地を訪れた後、6月下旬に福島県を訪ねました。福島市から相馬市、南相馬市に向かい、浜通りの惨状を目の当たりにしました。

相馬市の風光明媚な観光地、福島県唯一の潟湖松川浦は完全な壊滅状態であり、南相馬の浜通りには船が陸に打ち上げられたままであり、瓦礫も多く残ってありました。

浜通りのかなりの地域は地盤沈下し、田は海水に浸されておりました。

南相馬では国道6号を南下し、福島第一原発から20km「警戒区域」の入口まで行ってみました。この先は一般人立入禁止です。



国道6号-20キロ入口の立入禁止
(2011/06/26 戸沼撮影)

この付近は何か静かなのです。田畑も草地も家並みも昔ながらに在るのですが、人影がないのです。南相馬市の20kmから30kmは「緊急時避難準備区域」に指定され、震災前、7万人の市民がいたのに5万人が市外へ避難してしまっただけです。

更に、30kmの外でも原発から放射性物質が飛んだ北西方向の飯舘村などは「計画的避難区域」に指定され、人々は住み慣れた土地を離れることを余儀なくされているのです。



設定された特定避難勧奨地点(×)

計画的避難区域等の指定

(資料 : <http://www.asahi.com>)

東京に帰ってから、飯舘村の菅野典雄村長に話を聞く機会がありました。飯舘村は畜産の盛んな村で、まじい(丁寧)な村づくり運動で知られています。3,000頭の牛を、一部を除いて殺さなければならなかった無念さ、5,000人の村人が村から離れ、ばらばらになり、その安全と安心の確保、さらには土地に築いたコミュニティが再興できるものかと心配を口にしておられました。

3年では長すぎ2年以内に事態が収まり、再び村人が飯舘に戻ることを「希望」に、故郷の力をバネとし、村の復活を目指して頑張り抜くと話してくれました。7月14日現在80,088人の県民が避難(避難指示、勧告及び自主避難)し、その内県外避難者は、35,776人(7月4日現在)と報じられています。

福島県は原発災害が現在進行形で続いているのです。

2. 脱原発の福島復興ビジョン

7月8日、福島県復興ビジョン検討委員会(座長 鈴木浩 福島大学名誉教授)は原子力災害に焦点を当てた復興ビジョンをまとめ、佐藤雄平福島県知事に提言しました。

〔前文〕

福島県は、地震・津波に加え、原子力災害及びそれに伴う風評被害という、これまで人類史上経験がないような災害に見舞われた。そして尾瀬や猪苗代湖など、その自然環境の美しさが高く評価されていた福島県の名前が、大規模事故を起こした原子力発電所の所在する場所“FUKUSHIMA”として世界的に知られることとなってしまった。

そうであるからこそ、福島県は新たな社会の在り方を提示するなど、世界に誇ることができるとような復興の姿を示さなければならない。

〔基本理念〕

1. 原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会づくり
2. ふくしまを愛し、心を寄せるすべての人々の力を結集した復興
3. 誇りあるふるさと再生の実現

〔復興に向けた主要施策〕

- ・緊急的対応一応急的復旧・生活再建支援・市町村の復興支援
- ・ふくしまの未来を見据えた対応
 1. 未来を担う子ども・若者の育成
 2. 地域のきずなの再生・発展
 3. 新たな時代をリードする産業の創出
 4. 災害に強く、未来を拓く社会づくり
 5. 再生可能エネルギーの飛躍的推進による新たな社会づくり
- ・原子力災害対応一原子力災害の克服

これらの復興ビジョンについての提言をまとめた検討委員会は「福島県は未だ原子力災害が進行中であり、何より原子力発電所事故の早期収束が復興の前提」、「福島県における被害はあまりにも甚大であり、国の全面的な

支援が必要不可欠である」と内外に訴えています。

福島県の復旧支援についてはなによりも現地における原発事故の収束であり、県土が人が住める大地であることを証明することです。福島の大地のよみがえりまで復興は終わるものではありません。国もこれを下支えすべきです。提言にあるように、十分な原子力損害賠償と原子力に係わる諸国際機関の福島県への誘致・移転を、国として後押しすべきです。

福島県内の土壌の放射能濃度は4ヶ月で大幅に低下していると報告されております。科学的根拠に基づく安全を見極め、風評被害を払拭し、福島県は縮退することなく復興に向かうべきです。

3. フクシマから日本を変える

3.11を機に、福島県に起こった原発事故はまさに国策によって進められた戦後日本のエネルギー政策の綻びを示すものであり、日本のかたち、地域のかたちの再検討を求めるものです。

過疎地の海岸に、地域の在り様と不可分につくられた日本の原子力発電所は、これまで日本の電力供給に大きく貢献してきました。石炭、石油などの化石燃料に代わるクリーンエネルギーとして、地球温暖化の緩和にもいっさいの威力を発揮しました。

しかし、今度の福島原発事故を機にあらためて、日本の原子力発電所54基の立地と地震津波への対応、原発そのものの性能を見ると、安全神話は崩れ、国民に少なからずの不安を与えております。

ともかく、地震列島日本に在る54基の安全確認は緊急の課題です。

原発事故は世代を跨いで人命に関わることです。国も太陽光、風力、地熱など、再生可能エネルギーを大胆に取り入れる仕組みをつくるべきと考えます。フクシマ原発事故は世界に大きな影響を与え、ドイツのメルケル首相はドイツ政府が脱原発を決めた理由について「フクシマ（福島第一原発）で、原発が甚大な結果をもたらすことを学んだからだ」と述べています。

今度のフクシマ原発事故は、文明論的にも、日本を変える契機となるに違いありません。

(2011. 07. 15)

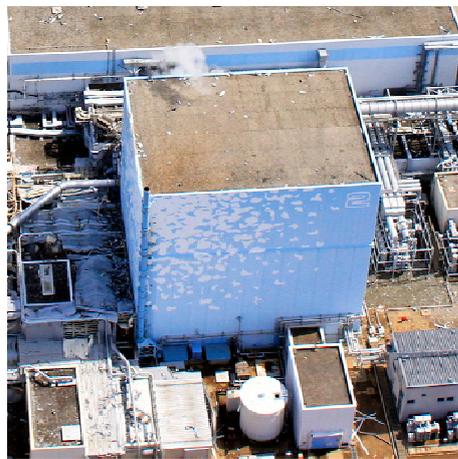
【参考文献】

1. 「平成 23 年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報（第 289 報）」福島県災害対策本部（平成 23 年 7 月 14 日発表）
2. 「福島県復興ビジョンへの提言」福島県復興ビジョン検討委員会（平成 23 年 7 月 8 日）

1 号機



2 号機



3 号機



4 号機



福島第一原子力発電所 建屋損傷状況(無人撮影機による=3月24日午前)

(資料:「朝日新聞3月31日朝刊」)

<説明>

※写真 上段左: 建屋中央部から水蒸気が上がる1号機

※写真 上段右: 建屋側面から水蒸気が上がる2号機

※写真 下段左: 建屋が粉々になった3号機

※写真 下段右: 建屋の骨組みが残る4号機